

ポスドク報告書

2020/02 MIT

荻田譲

2020年6月からMITのRadosevich研でポスドクを始めました。この報告書では、ポスドク研究室を決めるに至った経緯と現状について報告させていただきます。

実はPh.D.卒業後にポスドクをするか本当に悩みました。理由としては合成有機化学の将来性が低いこと、自分が仮にPIになれた時に、これで世界を変える！と思えるスケールの研究テーマが今のところ無いこと、研究以外の雑用が多いこと、この先一生涯の締め切りに追われ続けなければいけないことなどです。Ph.D.を取った研究室の卒業生は大多数が大手製薬会社に就職するのですが、製薬にとって薬理や生物と比較した合成のウェイトはそこまで高くありません。しかし自分は生物を4回勉強しようとして4回挫折した上、製薬にそこまで興味がありません（人の役に立つ有意義な仕事だとは思いますが）。組織と自分の関心が同じ方向を向いていない場所で働くのは精神衛生にもキャリアにも良くないと思い他の可能性を模索しようと思いました。

自分が本当に好きなことは何かを考えた時、最終的に出した答えがものづくりでした。しかし前述したように、化学においてもものづくり（=合成）の重要性は低下してきています。料理、建築、彫刻など、全体におけるつくるパートが未だに重宝されている分野を勉強し直すために大学へ入りなおそうかとも思ったのですが金銭的、年齢的なことを考えて怖気付いてしまいました。

アカデミアに進むにしろ、企業就職するにしろ、化学の場合は分野で名の通る所謂大御所研究室でポスドクをするのが定石ですが、化学に固執するのならばせめて自分が一番面白いと思う研究をしている研究室でポスドクをしようと思いました。その結果選んだのが今所属しているRadosevich研です。ボスのAlexはまだテニユアも取っていない若手ですが、研究内容は世界中どこを探しても似たグループがないほどユニークです（研究内容については多分2016年度奨学生の田主さんが報告しているのでそちらを参照してください）。しかしそれゆえにPhil（Ph.D.の時のボス）には大いに反対されました。反対の理由は前にも述べたように、アカデミック就活する際に不利にはならなくても有利にはならないからです。Philのアドバイスは最もで、自分のことをよく考えてくれているからこそ反対してくれているのですが、それを振り切ってRadosevich研でポスドクをすることにしました。PhilはいざAlexにコンタクトすると決まった時には大いにサポートしてくれました。

行きたかった研究室に行ったものの化学に対する不安感は未だに払拭しきれず、将来の方向性を暗中模索しています。MITのような総合大学は課外学習のカリキュラムも充実しており、ポスドクでも聴講できる授業があります（ポスドクの本分は労働なのであまり授業を取らないように釘を刺されますが）。先日、背伸びをしてIntroduction to Deep Learningという講座を聴講しましたが、入門編とはよく言ったもので難しすぎて途方に暮れてしまいました。しかし、この何が起きているのか理解するのに精一杯で、説明の一行を何度も何度も読み返すような、全く新しいことを勉強しようとしているときの頭が締め付けられて苦しい感じは久しぶりで気持ちよかったです。Scrippsは良くも悪くも生物化学のアカデミック志向がかなり強い組織だったので、こういった広い視野を持ち直すことの良さを再認識しました。プログラミングはまだまだ全く身になって

いませんが引き続き頑張っていきたいです。コロナ前は陶芸やガラス細工のコースなどもあったようなので再開したら是非とってみたいと思います。

Baran 研が 50 人規模でポストクが多数の研究室であったのに対し、Radosevich 研は十数人程度の小さい研究室でポストクも 4 人くらいしかいません。ロックダウン下で始まったため初めの 1 ヶ月くらいは研究室にもいけず、メンバーと Zoom で会話するだけでした。Alex とは未だに 2 回しか会ったことがありません（うち 1 回は 2 年前のインタビュー）。いざ研究室に行くのが許可された後も 1 日 3 時間しか滞在が認められず、プロジェクトを進めるのにかなり苦労しました。簡単な反応でも中途半端な時間がかかる場合は別のプロシージャ探して制限時間内に全てが収まるようにするなど、効率的とはいえない状況でした。今は時間制限がなくなりましたが、ミーティングやデスクワークなど研究室でやる必要がない仕事は極力家でやるように推奨されています。Baran 研が 100%有機化学であったのに対し、Radosevich 研は有機と無機のハイブリッド研究室です。研究室内でも専門領域がかなり違う人が混在しており面白い環境です。自分の専門性が研究室で必要とされる機会も少なくなく、逆に無機的、計算化学的なことは学生にたくさん教えてもらっています。

ボストンでの暮らしには比較的満足しています。以前いたサンディエゴに比べて天気や季節の変化があり、色々な服を着られるのが楽しいです。街がコンパクトなので自転車ですらどこにでも行けるのも非常にありがたいです。サンディエゴは坂が多く舗装もあまり整備されてなかったのに対し、ケンブリッジはどこにでも自転車レーンが整備されているのが素晴らしいです。街中のアイスクリーム屋は大体全て制覇しました。二郎系ラーメン屋があるのも生活に潤いと活力を与えてくれます。初めて行った時にたまたま店のプロモーション用写真のモデルにしてくれるという幸運にも恵まれました。継続して週 1 くらいで通って恩返しをしています。このようにコロナ禍とはいえ、Ph.D.時代に比べるとだいぶ人間らしい生活ができています。院生の頃はセルフロックダウンとでも言うような研究室と自宅を行き来するだけの生活だったせいかもしれません。コロナ禍が収まって街が完全に開けた暁にはどうなるのか今から楽しみです。